[別紙2]
[課程—2]

審査の結果の要旨

氏名　井出（大河内）　彩子

本研究は外傷性頸髄損傷者を対象とし、彼らが受傷後に経験した「困難」および「対処」の特徴をカテゴリーとして導き出し、彼らの障がいとともにある人生の再構築への支援方法の示唆を得ることを目的に、インタビューと観察からデータを収集し、グラウンディッドセオリー法による分析を行い、下記の結果を得た。

1．　参加者の身体的困難は、運動機能不全と頸髄損傷に随伴する症状による慢性的な健康管理の必要性という二つの健康問題に由来する困難に二分された。しかも、それぞれの困難において、客観的側面と主観的側面があることが示された。そして、身体的困難の客観的側面が、彼らの心理的困難や社会経済的困難の発生に寄与していることが明らかになった。
2．　障がい由来のスティグマによる心理的苦痛が社会関係の縮小に関係する一方で、就労困難という社会的困難が家族への負債感や無力感という心理的困難に影響を与えており、頸髄損傷者の身体的・心理的・社会的困難は重なり合っていることが明らかになった。
3．　参加者の対処は運動機能障害・慢性的な症状・心理・社会生活に対する自己管理から構成された。運動機能障害に対する対処も必要なところが、慢性疾患患者が求められる自己管理とは異なる、頸髄損傷者の対処の特徴であった。
4．　参加者が行うセルフケアは、受傷直後の運動機能障害に対するリハビリテーションから在宅生活における症状管理にその焦点が移っており、しかも医療職の関与は徐々に間接的になっていた。また、彼らの生活が再構築されていくにつれて、セルフケアの目的は症状管理から健康の維持・増進に変遷し、QOL が健康管理方法の選択基準となっていた。そして、このようなセルフケアの変遷には障がいを肯定的に捉える身体観・健康観への変化が関係していると考えられた。
5．　障がい受容と社会参加の進展の程度が、参加者の障がいとともにある人生の再構築の程度を左右していた。特に、障がい受容の進展する過程には、身体の受容から自己の受容への変遷があることが頸髄損傷者の特徴であった。

以上、本論文は外傷性頸髄損傷者の主観的困難と客観的困難に着目することにより、身

体的困難の客観的側面が心理・社会的困難の主観的側面の発生に影響しているという、従来報告の少なかった、彼らの困難の構造を明確化した。また、彼らの困難は多重的であり、従来行われてきたセルフケア技術の獲得という身体面を中心とする援助だけではなく、心理・社会的困難に対する援助も必要であることを示唆できた。さらに、彼らの障がいとともにある人生の再構築の過程には、症状管理を主目的とするセルフケアから健康の維持・増進を主目的とする健康行動への変遷と並んで、障がい受容と社会参加の進展がみられること、このような積極的な再構築には障がいに対して肯定的な身体観・健康観の形成が影響していることを明らかにできた。本研究で得られた再構築の過程は、従来その内容が整理されてこなかった障がい受容という概念のなかでも、特に自己受容を促進するような医療職からの支援の必要性を示唆している。本研究結果を活用することによって、彼らの再構築に役立つリハビリテーション内容や彼らの自立概念を尊重した在宅生活の支援方法の発展に貢献できると考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。